



校長室だより

「フレデリック ～ちょっとかわった野ねずみの話～」より



朝夕の気温がマイナスになる日も増え、いよいよ冬本番を迎えた今日この頃です。2学期も終盤に差し掛かかった先週、学校では「冬の読書週間」を企画し、読書に親しむ雰囲気を作っています。そこで昨日の「校長講話」では、「冬の読書週間」にちなんで次のような絵本の読み聞かせをしました。

「図工」(芸術)を学ぶ理由とは？

全校の皆さん、おはようございます。今日も気持ちよいあいさつが出来ましたね。さて、先週は「冬の読書週間」でしたね。今日は「冬の読書週間」にちなんで1冊の絵本の読み聞かせをしたいと思います。今日のお話は「フレデリック～ちょっとかわった野ねずみの話～」という話です。ではスライドを見ましょう。

牛がぶらぶら歩いてる。馬がぱかぱか走ってる。そんな牧場にそって、古い石垣があった。納屋にも、サイロにもほど近い、その石垣の中、おしゃべり野ねずみの家。けれどお百姓さんが引っ越してしまったので、納屋はかたむき、サイロはからっぽ。その上、冬は近い。小さな野ねずみたちは、とうもろこしと、木の実と、小麦と、ワラを集め始めた。みんな昼も夜も働いた。ただ・・・フレデリックだけは別。

「フレデリック、どうして君は働かないの？」みんなはきいた。「こう見えたってはたらいっているよ。」とフレデリック。「寒くて暗い冬の日のために、僕はお日様の光を集めているんだ。」そしてまた、フレデリックが座り込んで、牧場をじっと見つめていると、みんなはきいた。「こんどは何してるんだい、フレデリック？」フレデリックはあっさり答えた。「色を集めているのさ。冬は灰色だからね。」また、ある日フレデリックは半分眠っているみたいだった。「夢でも見ているのかい、フレデリック。」みんなは少し腹を立ててたずねた。「違うよ、ぼくは言葉を集めているんだ。冬は長いから話の種も尽きてしまうもの。」冬が来て、雪が降り始めた。5匹の小さな野ねずみたちは、石のあいだの隠れ家にもこまった。はじめのうち、食べ物も沢山あった。野ねずみたちは馬鹿なキツネや間抜けなネコの話をし合った。みんなぬくぬくと楽しかった。けれど少しずつ木の実や草の実が減っていった。ワラもなくなった。とうもろこしも昔の夢。石垣の中は凍えそう。おしゃべりをする気にもなれない。

その時、みんなは思い出した。お日様の光や色や言葉について、フレデリックが言ったこと。「君が集めたものは、いったいどうなったんだい、フレデリック。」みんなはたずねた。「目をつむってごらん。」フレデリックは言った。「君たちにお日様をあげよう。ほら感じるだろう、燃えるような金色の光・・・」4匹の小さな野ねずみたちは、だんだんあたたかくなってきた。これは魔法かな？「色は？フレデリック。」待ちきれなくなって、みんなはせがんだ。「もう一度目をつむって。」そして、フレデリックが、青い朝顔や、黄色い麦の中の赤いケシや、野いちごの緑の葉っぱのことを話し出すと、みんなは心の中に塗り絵でもした様に、はっきりといろんな色を見るのだった。

「じゃあ、言葉は？フレデリック。」フレデリックは咳払いして、ちょっと待ってから、舞台の上の俳優みたいにしゃべり始めた。「3月に誰が氷をとかすの？6月に誰が4つ葉のクローバーを育てるの？夕暮れに誰が空の明かりを消すの？誰が月のスイッチを入れるの？それは空に住んでいる4匹の小さな野ねずみ。僕と君そっくりの。春ネズミ、夕立を降らせる係。夏ネズミ、花に色を塗る係。秋ネズミ、クルミと小麦の係。そして、最後は冬ネズミ。小さな冷たい足してる。季節が4つでよかったね。1つ減ったらどうなることか。1つ増えたらどうなることか！」終わるとみんな拍手喝采。「おどろいたなあ、フレデリック。君って詩人じゃないか！」

フレデリックは、赤くなっておじぎをした。そして、恥ずかしそうに言ったのだ。「そういうわけさ。」おしまい。

12月の校長室だよりは、先週行った「冬の読書週間」に関わって「フレデリック」の絵本の話を書きました。私は図工美術教師をずっと続けて来ましたが、この絵本に若い頃出合って「図工美術を学習する意味のひとつ」を学びました。冬休みも近づいて来ています。親子でぜひ本に親しんでいただき「わか竹」のようにしなやかな心を育てていただければと思います。本日より保護者懇談会も始まりました。年末のお忙しい中お世話になります。2学期も最後までご支援・ご協力よろしくお願ひ致します。

佐久市立岸野小学校

*ご意見、ご要望、お問い合わせ

などは、下記までお寄せ下さい。

TEL 0267-62-0384

Fax 0267-62-0542

